（写真提供：株式会社マイナビ MY FUTURE CAMPUS MFCアイデアソン2015＝３点全て）

優勝した和田ゼミ、チーム「じょじの奇妙な物語」の４人。左から増田さん、岡部さん、中條さん、門倉さん

「ＭＦＣアイデアソン2015」経済学部和田ゼミ生４人がＶ

「Credit I ～ safety life with your “EYE” ～」

「目」でカード決済?! 新発想絶賛

学生が独自のビジネスプランを競う「MFCアイデアソン2015」（主催・マイナビ）で、中央大学経済学部の和田光平ゼミ生4人が優勝した。クレジットカード市場へ放った新考案の決済システムは「目」を認証とする画期的なものだった。

▼チーム名「じょじの奇妙な物語」

「Credit I ～ safety life with your “EYE” ～」。2021年の日本は高齢社会、都市集中、モノがインターネット化する「IoT」の普及などさまざまな変化・進行が予測できる中、「キャッシュレス化」に着目した。

既存のキャッシュレスの代表例として「クレジットカード」があり、2015年～2020年のクレジットカード市場が約18兆円増加すると予測される一方、2015年の不正使用額は約100億円。

安全性やさらなる利便性の向上を図るため、複製の難しい虹彩にクレジット機能を登録し、目をスマホの虹彩認証システムを媒介として、スマホを店舗のリーダーにかざし、決済を行うシステムを考案した。（じょじとは中條さんのニックネーム）

▽メンバー

氏名	学科	学年	出身高
中條　博明	経済	4	神奈川県立横須賀大津高
増田　一晴	経済	4	中央大学高
門倉　勇太	経済情報システム	4	神奈川県立横浜栄高
岡部　拓未	経済情報システム	4	神奈川県立生田高

３年生だった昨年12月20日。アイデアソンの会場で、中條博明さん、増田一晴さん、門倉勇太さん、岡部拓未さんの４人は審査員からの鋭い指摘を次のプレゼンテーションに生かそうと躍起になっていた。

１時間ほどの休憩中、発表内容を改良する。新しい内容の事実確認、パワーポイントの表示変更、総合点検など。４人は手際よく動いた。

ビジネス展開「GO」

参加した企業ごとに計４回発表した。２回目以降、内容がどんどん良くなっていく。「なるほどと思った指摘は取り入れます。指摘はありがたい」とゼミ長の岡部さん。

プレゼンで、発表者はパワポをあまり見ない。審査員の顔を見ながら落ち着いて話す。自分たちのアイデアをきちんと伝えることが大切だ。発表後、審査員の意外な質問にも誠実に答えた。

クレジットカードが生活に溶け込み、市場は2020年までに約18兆円増加すると予測される。一方で、不正使用額は2015年時点で早くも約100億円にも上る。

４人はここに着目した。安全性を向上し、さらなる利便性を高めるため、複製が難しい虹彩にクレジット機能を登録した。「目」をスマートフォン虹彩認証システムの媒介とする新発想。まさしく「目」のつけどころが違った。店舗などでの決済方法は従来通りとした。

「斬新さと現実性のバランスが難しかったです」とはリーダーの中條さん。学生のビジネスアイデアは、これまで利用者視線で“こんなモノがあったらいいな”という程度だった。彼らは大きく脱却した。審査員による優勝の決め手は「現実性がありました」。ビジネス展開へゴーサインが出された。

「考え」を「形」にする

優勝プレゼンはゼミ学習から生まれた。所属する和田ゼミはマーケティングを主要テーマとし、少子高齢化が進む暮らしのなかで社会に役立つモノを考え、実現へ討議を尽くし、意見交換などで補強して形にする。「考え」を「形」にするまでが、ゼミの醍醐味だ。

２年次の９月下旬。ゼミ開講当初は、和田先生による講義で進む。次第に学生が意見を出すようになる。別のゼミ生がそれをよく聞く。全否定はしない、一度は肯定して、質問し意見を出す。「本気で議論しますが感情論ではありません」（中條さん）。

思考力、対応力、調査力などが徐々に身についていく。学内の検索サービスを利用して、日経ビジネス、週刊東洋経済などの経済誌も読む。「ビジネス志向が高まります」とは門倉さんだ。

ふらっと経済学部棟の１階ロビーに足を運ぶと誰かがいる。そしてまた１人と、自然に人が集まり議論が始まる。「そこに行くとメンバーの誰かしらがいて、話が盛り上がっていく」（増田さん）。

ゼミ学習時間の１時間半は、班単位の発表や意見交換の場。それを試合とすると、班員による議論は練習だ。

発表会場で神妙な表情の４人。左から岡部さん、門倉さん、中條さん、増田さん

練習中に独自なアイデア、斬新なアイデア、現実性のあるアイデアなどが続出。それぞれが化学反応を起こし、新たな発見がある。「勉強が楽しいっていう感覚は初めてだと思います」と中條さん。メンバーは時に大学閉門時刻の午後11時近くまで議論を重ねた。

「頑張りがカッコイイ」

ゼミは２年次から始まり、前期に各ゼミによる選考がある。増田さんは残念ながら選に漏れ、ゼミ生の潑剌（はつらつ）とした姿を横目で見ていた。和田ゼミが追加募集で門戸開放した３年次から仲間入りした。

照れながら、「僕は中途入学です。岡部くんに声かけてもらってホント良かったです」とにっこり。笑顔になったのにはワケがある。「生活が一変して、いままでのやらされる勉強が自分で考えて進んでやるようになりました」

「ちょっとでも頑張る気持ちがあれば、ゼミには入ったほうがいい。ゼミには頑張ろうとする学生がいます」（岡部さん）。「そう、真面目になる環境がゼミにはある」（増田さん）。「学業で何か真剣にやりたいと思い、ゼミに入りました」（中條さん）。

勉強熱心はガリ勉とヤユされた時代もあったようだが、現代の大学生活は違う。「頑張るのはカッコイイこと」。次代を担う４人が声をそろえた。

アイデアソンに参加した和田ゼミの他2チーム

▼チーム名「ティーム長野」

私たちは、地方の人々に洋服の購入を促進させるアプリ『マイコーディネーター』を提案しました。地方活性化の一翼を担いたいと思います。

▽メンバー

氏名	学科	学年	出身高
佐藤　秀宣	経済	4	市立銚子高
片山　　純	経済	4	福島県立白河高
佐藤　勇哉	経済	4	埼玉県立松山高
皆川　　萌	経済	4	中大杉並高

▼チーム名「たまごっち」

私たちの班では、外国人観光客と日本人をつなぐガイド、外国人観光客同士のつながりを作るアプリケーションを提供するビジネスを考えました。

▽メンバー

氏名	学科	学年	出身高
三枝　治樹	経済	4	中大付高
山口　翔平	国際経済	4	湘南工大付高
棟尾智恵里	経済情報システム	4	中大杉並高
塚原　未悠	経済情報システム	4	神奈川大学付高

アイデアソンに参加した和田ゼミ生。「ティーム長野」、「たまごっち」のメンバーも一緒に

３年次に卒論、就活でアピール

就職実績でも和田ゼミの評判はいい。名だたる企業・団体への内定者多数。ゼミ学習で人の話をよく聞き、自分の意見を述べる。落ち着いた態度などが採用側の求める人材となっているようだ。卒業論文を３年生で仕上げ、就職活動で卒論をアピールできるのも、和田ゼミの良いところ。

「数字に惑わされません」

ゼミ学習を進めるうち、メディアなどのアンケート結果に懐疑的になったという。回答は質問の仕方によることが多く、なかには誘導的な問い掛けも。中條さんは「質問者の意図が分かると、本質も分かります。出てきた数字には惑わされません」とゼミの学習効果を口にした。

合宿が生むタテの絆

ゼミ合宿では、先輩後輩の関係が深まる。先輩が合宿を訪れ、プレゼン審査員となり、アドバイスする。後輩は学内プレゼン大会などに駆けつけて応援や運営の手伝い。「先輩たちの期待に応えたい、後輩にはいい先輩でいたいです」（中條さん）。同級生のヨコのつながりに先輩後輩のタテの線が重なってプラスを生んでいく。

もっと知りたい へぇ〜

和田光平ゼミ

演習テーマは「少子高齢化・人口減少時代のマーケティングと地域戦略」。２年次にマーケティングモデルと統計分析の基本を学ぶ。３年次からチームを組んでテーマを決め、その市場のマーケティング分析や地域の活性戦略などを考える。

ゼミの授業では、学生主体のアクティブラーニング形式でさまざまな問題を発見し、その解決策、改善策を議論。自分自身で考え、そして意見を相手に伝えるという力が養える。３年次に学内のプレゼンテーション大会やビジネスプランを競う「野島記念」などに参加。毎年のように優勝、準優勝へ結びつけている。

ＭＦＣアイデアソン

株式会社マイナビが主催するビジネスプランコンテスト。課題テーマに対し、アイデアを練り、企業にプレゼンテーションをする。参加は個人、チームを問わない。

企業担当者からフィードバックを受け、その場で反映して次に挑む。優勝者（個人、チーム）に10万円の商品券が贈られる。アイデアソンとは、アイデアとマラソンを掛け合わせた造語。ＭＦＣはマイナビが行うキャリア育成プログラム「ＭＹ　ＦＵＴＵＲＥ　ＣＡＭＰＵＳ」の略。